

第139回 日文研フォーラム



西洋における俳句の新しい受容へ

Toward a New Understanding of Haiku in the West



エッケハルト・マイ

Ekkehard MAY

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

西洋における俳句の新しい受容へ

Toward a New Understanding of Haiku in the West

● 発表者 ●

エッケハルト・マイ
Ekkehard MAY

ドイツ・フランクフルト大学 教授
Professor, University of Frankfurt

国際日本文化研究センター 客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



2001年 5月 8日 (火)

発表者紹介

エッケハルト・マイ

Ekkehard MAY

ドイツ・フランクフルト大学教授

Professor, University of Frankfurt

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Professor, International Research Center for Japanese Studies

1937年 9 月 ドイツ、メクレンブルク州生まれ

1970年 9 月 ドイツ、マルブルク大学博士号取得

1970年から1981年 4 月まで ドイツ、ボーフム大学東亜研究所助手、研究員

1981年 4 月 ドイツ、フランクフルト大学日本学科主任教授

2001年 3 月 国際日本文化研究センター客員教授

主な著書

1. Das Tôkaidô meishoki von Asai Ryôï. Ein Beitrag zu einem neuen Literaturgenre der frühen Edo-Zeit, Wiesbaden 1973
2. Die Kommerzialisierung der japanischen Literatur in der späten Edo-Zeit (1750-1868), Wiesbaden 1983.
3. Furui Yoshikichi: Der Heilige (Roman), Übersetzung, Frankfurt a.M./Leipzig 1993
4. Kikaku illustriert und zeitversetzt. Zur Rezeption klassischer haiku in den meisho zue der späten Edo-Zeit. In: Wasser-Spuren, Festschrift für W.Naumann, Wiesbaden 1997, pp.254-278.
5. Shômon. Das Tor der Klausur zur Bananenstaude, Mainz 2000.

はじめに

今日の私の講演のテーマは少し有りふれたもののように聞こえるだろう。『イギリスにおける俳句』、『フランスにおける俳句』、『ポーランド、スペインにおけるそれ、いやもしかしたら『アイスランドにおける俳句』というテーマもあり得ないことはない。俳句はどこにでもあるから。『ローマ帝国における俳句』は先ずない筈だと思っていたら、Phantasie Schutzgebiet / Imaginatio Hortulus (ファンタジー保護地区) というラテン語とドイツ語の俳句を含めている本に出会う。(E.L.Biberger 著、O.Raith ラテン語訳。ドイツ Kallmünz 一九九八)。

国際日本文化研究センターのフォーラムで、過去十年において、それぞれの国の俳句の受容について講演した研究者もあって、例えば、一九九一年に、サトヤ・B・ワルマ氏が『インドにおける俳句』、一九九五年に、タチャーナ・L・ソコロワ・デリューシナ氏が『俳句の国際性——西欧の俳句についての一考察——』というテーマを取り上げた。

さて、なぜ、また、私のような講演が必要だろうか。私は、国際日本文化研究センターに来る前に、図書館のデータベースを「haiku」という検索語でクリックすると、それで約二〇〇件もヒットした(西欧諸国語で書かれている本だけ)。「haiku」という言葉が

タイトルに現れていない本も加えると、倍ぐらいになるだろう。西洋でも図書館は俳句についての本でいっぱいだ。特に翻訳、自由翻訳 (free translation)、詩的翻訳 (poetical translation)、そしてヨーロッパ諸国語 (原文) で書かれているHaiku、又は俳句の形を真似ている短詩の集は数え切れないほど多い。このような本だけで、ひとつの専門図書館を容易にうずめることができる。(例えば東京新宿の俳句文学館)。

私のテーマは有りふれているだけはなく、その上ちよつと大げさのようにも聞こえるだろう。勿論、私は西洋のすべての国の事情について話すことができないが、だからといってドイツだけを例として取り上げると、問題が十分に把握できない。西洋における俳句の受容の歴史について一々解説するつもりはないが、これから私はむしろ、「受容の道」(ways of reception)を示して、それによって「受容の傾向」(tendencies of reception)をいくらか明らかにすることに努めたい。「受容の道」は当然のことながら間違っている道をも含めている。そして、終りの方で、新しい可能性と新しい理解への道を指摘できると思う。

(注：私のこれからいう「俳句」はとりわけ古典の俳句、すなわち徳川時代の俳句を意味する)

受容の道、受容の傾向

西洋における俳句の紹介や理解について実に偉大な役割を演じたR.H.Blythの言葉を先に引用することにしよう。Blyth氏は彼のHaikuという四冊本の第四巻（一九五一）の序文に次のように述べた。

Japanese Literature stands or falls by haiku, in my opinion, but its unique characteristic makes it a difficult matter to assess its position in world literature.

（日本文学の成否は、私の考えでは、俳句次第ではあるが、そのユニークな特徴が世界文学の中の位置付けをむずかしいことにする。E・M訳）

Blyth氏のその判断は言い過ぎかもしれないが、俳句が日本文学の中で一番独特のジャンルであることは、議論の余地はないだろうが、世界文学の規模でも、全く他に類を見ない文学形態であることは、明らかな事実である。

このような、世界文学の中でも、特殊性の著しい「俳句」の受容（受け入れ方）につ

いて、多くの問題点があるのは、誠に遺憾に思われてならない。問題点というのは、誤訳を意味するだけではない。俳句の訳では、背景、又はコンテキストが非常に大事なことである。一句、一句の背景にある文化の伝統や自然に関するものをも訳さないと、説明しないと、誤訳と同様だと思う。

西洋における俳句のイメージは全般的に見て翻訳のアンソロジーの形をしている句選集で決められている。このような翻訳アンソロジー（一般読者向けの本）は、特に間違いの多い、説明のない（又は少ない）ものである。

理由はなぜかと尋ねると、答えは次のようである。

第一 俳句はあまりにも短かすぎる。

第二 俳句は簡単過ぎる（ように見える）。

その簡潔さが多くの人々を俳句の翻訳を「いじる」ことへ誘い込む。要するに、素人（又はずぶの素人）の翻訳が圧倒的に多いのである。

それで、古典の散文作品、例えば平安時代の物語とか、中世の随筆とか、江戸時代の浮世草子などの翻訳にはどんな場合にでも着手しない人、すなわち日本語の最低基礎の知識しか持たない人がためらわずに古典俳句の「翻訳」に取りかかる。

ゆえに、Haikuというジャンルの評判が、どれほどすぐれて広い読者層があっても

(又はあるだけに)、好くないということになる。日本文学の研究を対象とする Japanology (日本学、Japanologie) から見ると、俳句の研究、俳句の翻訳が、古典俳句の場合でも(一七、一八世紀のもの、芭蕉の句をも含めて)あまり真面目なものとなっていない。

私が十年ほど前に俳句の翻訳と解釈に取り掛かったとき、同僚たちから少し不信の目で見られていたのである。勿論、学術的な俳諧の研究は別のもので、俳文、紀行文、俳論などについての研究が真面目なものに見られているのは当たり前である。西洋における俳諧についての学術的な本や雑誌の論文が数多く発表されたが(ドイツの場合をも含めて)、読者の数は狭い範囲内に限られている。

その反面、広く知られていて、外国の翻訳文学のなかでは割によく売れている、そして—これは重大な事だろう—たくさんの読者に愛されているものは、前にも言ったように、大衆向けのアンソロジー(俳句選訳集)である。

間違いの多い、部分的に間違いだらけの訳が西洋での俳句のイメージを形作るのは悲しいことである。

その訳詩集といふべき本の形はめずらしくも、ドイツ、フランス、アメリカなどのものが互いによく似ている。それは小型のサイズで薄く、挿絵がたっぷりいれてあるが、

説明がほとんどない。序文には常に俳句の翻訳の難しさについて論じられているが―原則として詩、特に抒情詩の翻訳の可能性、又は不可能性など―それから俳句の素晴らしい単純さが誉められている。終わりには、大抵の場合には、二つの名前が挙げられていて、それは前にも引用したR.H.BlythとMiyamori Asatarō（宮森麻太郎）という人である。本の後ろに、参考文献がある場合は、この両氏の名前を見つけることができる。両氏の著書を使って大変参考になった、ここに感謝の意をあらわす、という言葉が必ずと言っていいほど書き添えてある。

西洋における俳句アンソロジーの源流

宮森麻太郎氏の *An Anthology of Haiku Ancient and Modern*（一九三二年）とBlythの *Haiku*（四冊、一九四九―一九五二）の二書こそは西洋における俳句の受容の一番重要な入り口となっていた。これは確かな事実である。この外に、入門書のような著作もあるけれど（例えばH.G.Hendersonの *An Introduction to Haiku*（New York, 一九五八年）が特にあげられるべきものだが）、宮森氏とBlyth氏の両書には大きな特色がある。即ち一句、一句に日本語の原文がついていることである。だから、いくらか日本語の基

基礎知識を持っている人たちの為には最適の本になっている。原文、翻訳、注釈、そして俳句というジャンルについて一般的な解説は皆、一つの著書、宮森の場合には一冊の本の中にまとめてある。翻訳家には、これは文字通りの宝庫である。

宮森麻太郎の翻訳

宮森麻太郎氏は明治二年の生まれで、昭和二十七年に亡くなった（一八六九—一九五二）。専攻は英文学で、慶応大学や明治大学の教授であった。宮森氏の業績は主として翻訳の方面にあつて、日本文学を英訳の形で海外に紹介しようと努めていた。氏の著書の中では、西洋に最も広く知られているのは *Masterpieces of Chikamatsu, the Japanese Shakespeare*（英訳近松傑作集、一九二八年）と先にも紹介した *An Anthology of Haiku Ancient and Modern*（英訳古今俳句選集、一九三二年）だ。この本の初版（*One Thousand Haiku Ancient and Modern*, 一九三〇年）は著者が序文に書いたように「英語を勉強する日本人の学生のために」著したものだ（*...was intended for Japanese students of English...*）。

こういう教育的な態度や意図が、訳からも明らかに出てくる。いわゆる逐語訳（trans-

lation word by word) に近い英訳で、Masterpieces of Chikamatsu における free translation ではない。

第二版では、著者の目的は変わっている。序文から英語で引用する。

The first edition was enthusiastically welcomed by many scholars and critics... Their favourable reviews have encouraged me to undertake the present volume, which is intended principally for foreign readers who have no knowledge of Japanese literature. At the same time I have added the original verses printed in the Japanese and Roman characters for those foreign readers who have some knowledge of Japanese literature and also for Japanese students of English.

つまり、今度はとりわけ外国人の読者を目当てにした本で、英語を勉強する日本人の学生はこれに次ぐ。けれども、訳のスタイルは変わらない…少し固い、散文に近い、詩的な (poetical, lyrical) 味わいの乏しい、又は全然ない文章になっている。が、この英訳俳句選集の中では実に豊富な資料が仕上げられて、提供されている。約千句 (正確に言えば九七三句) が、短い注釈文と共に入れている。しかし、句の選択の仕方には問題があると思われる。序文からもう一度引用しよう。

Traditional themes for *haiku* poets are counted by the thousand. A considerable number of them are concerned with human affairs peculiar to Japan, such as The Doll's Festival, The First Reading in the New Year, The New Year's Decoration Pine-Trees which would be of comparatively little interest to foreign readers. Moreover, most verses treating of these themes are insusceptible of successful translation in English. Among the traditional themes dealing with nature, the most popular are the cherry-blossom, the plum-blossom, the maple leaf, the harvest moon, snow, the nightingale, the cuckoo, the skylark, the butterfly, the firefly and the cicada; and most masterpieces of great poets have these for their subject. The natural consequence is that *haiku* on these themes occupy the greater portion of the present anthology.

注目すべきところは次ぎの二点である。

1. 宮森の選集では、外国へ紹介する俳句が自然に関する季題を詠んだものに限られていること。(例えば、桜、梅、紅葉、名月、雪、鶯、ほととぎす、雲雀、蝶、螢、蟬など)。

いわゆる人事に関する季題の句はほとんど除外されていること。(例えば、読み初め、書初め、門松など)。

2. 選択に当たって、翻訳の可能性（又は不可能性）が十分に配慮されていること（好結果を目指す選択）。

このような選択による傾向がはつきりしているのであるが、そんな句の選び方では、本当の代表的なアンソロジーは成り立ちがたいものである。

以上の二つの問題は、後で結論の時に又取り上げることになろうと思う。

宮森のアンソロジーは一二章からなる。俳諧前期（一七世紀の前半）に始まって（The Pre-Basho Period）、それから年代順に進んで、現代の俳人の句に至る。現代と言うのは無論、出版当時の現代、すなわち大正と昭和初期を意味している。芭蕉の弟子、それから天明期俳諧（一八世紀の後期）までは、一句ごとに短い解釈文が加えられているが、一茶、子規と、その当時の現代の句に至ると、注は段々不必要とされて、少なくなってくる。

西洋における偉大な紹介者 R.H.Blyth

R.H.Blyth の Haiku という四冊本は宮森のような教育的な動機からなったものではない。

Blyth氏はイギリス人で、一八九八年（明治三二年）生まれ、一九六四年（昭和三九年）に亡くなった。Blythは若い優秀な学者として一九二四年に朝鮮に行つて、当時の京城帝國大学で英語やイギリス文学を教えた。「この頃から日本文化とくに禅に関心を持つに至り…参禅しながら鈴木大拙の著作を熟読した」『来日西洋人名事典、日外アソシエーツ、三七〇頁』。一九四〇年から金沢第四高等学校に赴任したが、戦争中は神戸で抑留され、戦後から死ぬまで、学習院大学の教授を勤めた。

彼の著作はそんなに沢山ではないのだが、テーマは幅が広い。イギリス文学、キリスト教、東洋の古典と思想、日本文化一般、禅と禅の古典、俳句と川柳などである。

Haikuという彼の主要作品は宮森のアンソロジーと違って、作者の年代順には進まない。第一巻 *Eastern Culture*（東洋文化）という解説の後、第二巻から第四巻までは四季順の俳句の紹介である。Blythはその外に *A History of Haiku* という二冊本も著した。これはBlythの死の直前、すなわち一九六三—一九六四年に出版された。第一巻は初期から一茶まで、第二巻は、一茶の時代から昭和初期までである。この六冊の、合わせて約二四〇〇頁にはおよそ六〇〇〇の俳句の訳と解釈が提供されているのであるが、重複を取り除くと、少なくとも四〇〇〇句が残る。（重複の場合には、同一の句に異なっている翻訳がついていることもあって、これがむしろ重訳者・翻案者のいい参考資料となつて

いると言えよう。

Blythの訳は逐語訳に近いものだ。A History of Haiku (第一巻) の序文に、彼は次ぎのように述べた。

The translations.. are as literal as the English language will bear.

(訳は…英語が耐え得る程、逐語訳だ。)

目的は違うが、結果的に宮森とBlythの訳は似ている。何物も付け加えずに訳することなのである。

勿論、Blythは自分の母国語で書いていたから、表現力がはるかに豊富で、時たまは、lyrical (詩的) な調子も感じられる。けれども、Blythはいわゆる “wonderful translations” をあくまで避けることにした。

注釈のほうも、宮森の簡単な鑑賞のコメントや事物の解釈に対して、Blythはいろんな方面からの注を施している。宗教思想や哲学の視点から俳句が論評されて、広く世界の文学作品から多くの引用が比較の為に入れている。弱点をいうと、俳句を禅の立場から解明することが多すぎて、純粹な、文学的なinterpretationの方が少ない。

大衆向けの俳句アンソロジー ドイツを例として

宮森とBlythの著作には西洋の俳句の愛好者に約5000句の訳と解釈が提供され、誠に理想的な資料が用意されていた。原典のテキストに拠らない（もしくは部分的にしか拠らない）大衆読者向けの俳句アンソロジーは、前にも言ったように、西洋の数カ国語に発表されていた。

これからドイツを例としてもっとも重要な、かつ、後でかなりの影響を及ぼしたアンソロジーを紹介しようと思う。

この諸本の「翻訳」は、すべての場合は、本当の意味の翻訳ではなくて、宮森とBlyth両氏の本、又は其の外の入門書の中にある資料を使って、俳句を自分の言葉（ここではドイツ語）に改作、重訳、改造（？）、翻案したのだ。ドイツ語のNachdichtung、これに当たる日本語がないのだが、原文の詩に基づいて新しく創作する、というような意味になる。

オーストリア人のAnna von Rottauscher氏は一九三七年にIhr gelben Chrysanthemen（ああ、黄菊よ）という本を出して、大きな反響を呼んだ。第四版（一九四一）は、その当時としては（戦争中である）4万という驚くべき部数が出た。v. Rottauscherの俳句の

翻案は所々上手くその句の内容をつかんで、ドイツ語に表わすことができたが、全体から見れば、調子が少し甘ったるく、誤解がないわけでもないのである。例えば

Mondenschein !

Auf meiner Matte sehe ich

Den Schatten von Tannenzapfen (p.61)

(月の光 畳の上には 松かさの影を見る)

(其角の元句：名月や 畳の上に 松の影)

v. Rottauscher の場合も、他のアンソロジーの場合も、どこまでが誤解であるのか、どこまでがいわゆる *dichterische Freiheit* (詩人の自由) であるのかが定めにくい。このような翻訳(翻案)の創造者(又は想像者?) は自分を詩人と見ているか、または意識しているからである。

本格的な詩人、すなわち自分の母国語でも自分の詩を作る人が俳句に魅せられて、内容を追感して(ドイツ語で *nachempfinden*) 追いかけてながら感じていると言う意味で、

新しい創作を短詩の形で試みている人も、西洋のどこの国でも少なくとも一人は居ると言える。

ドイツの場合ではManfred Hausmannという人がその人で、特に戦争直後の五〇年代に活躍した小説家、詩人である。ドイツ語圏に多くの注目を引いたのは、彼のLiebe, Tod und Vollmondnächte（恋、死、そして満月の夜）。初版が一九五一年に出て（Frankfurt a.M.）、第四版と思われる一九五六年版の発行部数は四万五〇〇〇部にも達した。これもまた、訳詩集としては大変な数であった。

Hausmannは自分の訳をÜbertragungと名付けた。それはÜbersetzungより少しフリーな翻訳を意味するのであるが、実際、彼の訳はかなり自由なtranslationで、時々、その訳された句の原形（original）のidentificationに困るほど原文から遠いものである。

次に掲げる句は原意からそんなに遠いものではないが、彼の翻訳の方法を明らかにする好い例である。

Über die donnernden Wogen der See

Wölbt sich der Schimmer der Milchstrasse

Schweigend hinüber zur Insel Saho (sic!) (S.61)

(ふうふうと音を立てている大波の上に

さらさら微光を放ちながら天の川が

黙然として佐渡島までアーチを描く。)

無論、芭蕉の有名な「荒海や佐渡によこたふ天の河」である。俳句としてHausmannの訳は随分長くなった。句で表わしていない対立が詩人の興味をそそっていた。音を立てている波と黙っている天の川。それでschweigend「黙然として」という表現で自分の印象を補っていたのである。解釈的な翻訳である。

Hausmannの訳はしばしば、日本人のドイツ文学者と歌人、俳人である高安国世（一九一三生）との合作の形をとっていた。こういう翻訳者チームが欧米のアンソロジーの場合にはめずらしくもなく、むしろ、一つの典型となっている。日本人の手でRoh-Übersetzung（粗・翻訳）ができて、Zielsprache（目標言語、target language）の詩人がこの原料と言うべきものを精鍊して、自分のマスターする母国語に改造するわけなのである。

ドイツにおける俳句の受容に最も大きな役割を果たした人は、Gerolf Coudenhoveであった。Coudenhove氏は（一八九八年生）、オーストリア人の外交官であったCoudenhove

「Kalerger」伯爵の三男で、母は日本人であった。長年、日本に住んでいて、日本語の知識もかなりあったようだが、日本文学を学術的な面から研究しなかった人である。

最初に出たのは *Vollmond und Zikadenklänge*（満月と蟬の音、Gütersloh 一九五五年）である。小さい本で、反響が極めてよく、版を幾度と重ねて、部数も相当なもののようなものである。日本文化に少しでも興味を持つ人の本棚には大抵、この本を見付けることができた。その上、カラーの美しい挿絵は本の半分ぐらいを占めていたので、いわゆる *Geschenkbändchen* 「贈り物の冊子」の機能を十分に果たしているので、特によく売れた。その中に訳された句は三四句しかなかったが、快い軽いリズムのドイツ語で書かれていたのである。

この本の成功がもっと大きなアンソロジーの出版を呼び出した。

Japanische Jahreszeiten（日本の四季）の初版は 1963 年 Zürich で出て、副題 *Tanka und Haiku aus dreizehn Jahrhunderten* がいう通り「一二三〇〇年間の短歌と俳句」を包括した。このアンソロジーは多くの愛読者を獲得することができ、その上、ドイツの Haiku という短詩形を創立するにも重大な役割を演じたのは疑いないことである。だが、問題点も少なくない。一つはドイツ語での言葉遣いである。あまりにも可愛い印象を与える訳文体である。小さくて、きれい、かわいらしくて仕方がない、というような

俳句のイメージを作り出した。とりわけ、縮小名詞 (Diminutiva) がしょっちゅう使われ、これが飽きるほど多いのである。Affe (猿) というのではなくて、Äffchen (小猿)、Frühlingwasser (春の水) はFrühlingswässertein (春の小水) になって、Bauer (百姓) はおかしくも、Bäuerlein (小百姓) となってしまったのである、などなど。私は本来、次の句だけは絶対に引用しないと心で誓っていたのだが、「古池や」はやむを得ないだろう。

Alter Teich in Ruh —

Fröschelein hüpf vom Ufersaum

Und das Wasser tönt

やっぱり、Frosch (蛙) ではなくて、これも小さくなって、Fröscheleinに変わっていた。直訳すれば、次の通りである。

古池はしんとしていて

小蛙は渚から跳んで

そして水の響きがする

無論、この Fröschlein は、音節のかずを整える為にも使つて（作つて！）いたに違いない。Coudenhove 氏の訳は、全般に見て民謡の調べよりも童謡（子供の歌）に近いのである。

Coudenhove はそのアンソロジーに和歌と俳句の翻訳を混ぜて、万葉集の山上憶良から、正岡子規や河東碧梧桐（一八七三—一九三七）までの作品を入れたのであるけれど、惜しくも、翻訳は皆、同じな訳文の調べで、皆同じように聞こえるのである。ジャンル別の違いは勿論、時代の相違は感じられない、俳人の個性的な表現は言わずもがな。

訳は注なしに並べられている。後書きに Coudenhove は次ぎのように述べた。

Überhaupt haben wir uns bemüht, möglichst nur solche Gedichte zu übertragen, die keines langatmigen Kommentars bedürfen, also keine Anspielungen auf in Europa weniger bekannte historische Ereignisse oder Werke der klassischen Literatur enthalten.

... Wir haben uns daher an bereits vorhandene Anthologien gehalten, die für Europäer bestimmt, im großen und ganzen auch dem Europäer verständliche Gedichte enthalten... (pp.383)

(全般的に、我々はなるべく長つたらしい注釈を要しない詩だけを翻訳することに努めていた。つまりヨーロッパにはあまり知られていない歴史の事件や古典文学の暗示を含んでいないものを。

：だから、我々はヨーロッパ向きの、ヨーロッパ人には大体においては分かり易い詩の含まれている、既刊のアンソロジーを根拠としたのである。)

ヨーロッパにおける翻訳俳句はどんなものであるか、そしてどのようにHaikuのイメージが歪んでいるのか、以上のいくつかの例でも察せられると思う。

最後に—last but not leastではなくて、last but worst—Jan Ulenbrookの著述を紹介しよう。Ulenbrook氏(詩人としての号、本名はMeyer; 一九〇九年生まれ)はもとSinologistで、中国文学の研究を通じて、日本文学の作品に接触したようである。最初の彼の翻訳アンソロジー(翻訳という言葉はこの場合ではふさわしくないかもしれない)が一九六〇年に出て、一九六三年、有力なInsel社Frankfurt a.M.)から再版された。残念なことに、最近、Reclam社から、有名なレクラム文庫(昔、岩波文庫の模範になった)の二冊本として新版になった(Stuttgart 一九九五/九八年)。その結果、とうてい勧められないほど質の悪い翻訳本がReclam社の名前で翻訳古典の權威を与えられたのである。この本では、一二六四句が四季順にあげられているのだが、注なしの無意味な句

の羅列に過ぎない。間違いや誤解が至るところにあつて、その上、変な、グロテスクなドイツ語で書かれている。出版社がこのような本を発行したのは、多分、日本の俳句というものは非常に奇妙な文学でなければならぬと考えたからであろう。でも、Jlenbrookの本のファンがないわけでもない。かえつて、奇妙な、わけのわからぬテキストが魅力的かもしれない。

「私は、この句がわからないが、ああ、これはさぞあの東洋の神秘さであろう」と。

新しい道を探す

では、新しい、正しい俳句の受容とはいったいどんなものであろうか、何の形で実現できるのであろうか。受容の第一期と言うべき時期はもう過ぎてしまった。既成の翻訳から重訳を「作る」ことはもう許されていない。

以上のような状況から見て、次ぎの考慮や要求があげられるのである。以下の五項目は、言うまでもなく一般読者向けの出版物についてであり、学術書は無論別である。

1. 選択の問題

翻訳アンソロジーの句は代表的なものでなければならない。翻訳の為に適する句だけを選び出すと、俳句の全体としてのイメージが歪められる。

Darwinism、ダーウインの進化論に「最適者の生存」(Survival of the fittest) と云うスローガンがある。翻訳文学の場合にもこういう言葉を当てはめることができる：「The survival of the fittest — for translation」

代表的な句は当然のこと、あらゆる方面からの句を包括しなければならない。すなわち、「外国人に分かりにくい句」、例えば歴史や古典文学の暗示(本歌、本説など)を含んでいる句をも訳すること。

2. 注釈の問題

従って、正確で詳細な注釈が必須の条件。伝統文化、歴史、古典文学の背景、自然と気候の関連を説明する必要がある。俳句はヨーロッパのそれとは別の生活体験や生活環境から生まれたもので、注解なしで完全に訳そうとするのは思い違いである。出版社(とくにドイツの?)は文学翻訳にあたって注を遠慮する。文学作品の自律に矛盾するからだという。けれども、部分的にしかわからない、又は完全にわからない文学作品をどういう風に適切に鑑賞することができるであろうか。味わおうとしても、誤りに陥る危

険はほとんど免れない。

3. 専門学者の責任

一般読者向けの俳句の翻訳も、当然のことで、江戸時代文学の西洋の専門家が書くべきこと。「原文」をただ宮森やBlythのアンソロジーから取ると、間違いが起こりがちである。正しいテキストだけですべてのinformationを得ることができる。(例えば、前書・異文があるかどうか、今までの重要な解釈文など)。専門学者は(この場合では、西洋の日本文学を専攻とするJapanologist)一般読者の正しい受容の為にも責任を持つていると私は思う。学術雑誌で俳諧について論文を書くのが加えて重要な課題なのであるけれど、それは俳句の一番大きな読者層、即ち、俳句の愛好者、熱心な読者に達することができない。専門雑誌であるならば、一〇人か一五人が論文を読む(ドイツの場合)。大衆向けのアンソロジーを書くと、少なくとも五千人がこれを読んで、五万人か、一〇万人の読者を獲得することも可能である。

4. 専門知識に裏づけられたアンソロジー

学問の側から、たくさんの俳句のファンを考慮に入れるべきこと。その為、アンソロジーの外装を変える必要はないと思う。挿絵が大事で、テキストの受容と鑑賞に大きな役割を演じる。墨絵、書などが人気で、本のその特別の装幀全体は東洋に、日本文化に

熱心である読者の為に不可欠な条件である。

その意味では、G.S.Dombrady の著作はいい例になる。Auf schmalen Pfaden durchs Hinterland『おくのほそ道』のドイツ語訳 (Mainz 一九八五) は、東洋の翻訳文学にとっては一つの小さいベストセラーになっている。正確な部数はわからないが、六万部、八万部を超えるかもしれない。『猿蓑』の選訳もよく売れているようである。Dombrady 氏の著作は学術書でありながらも、一般読者に面白く読まれるものである。(けれども、氏の一番分厚い本、Dichterlandschaften『詩人の景色』、蕪村句選、(Mainz 一九九二) は、資料が豊富過ぎて、一般読者にはむしろふさわしくないように思われる)。

5. 新しいタイプのアンソロジー

混ぜ物のアンソロジーの時代はもう過ぎ去っていると私は思う。一七世紀から二〇世紀までの俳句を並べることは、それぞれの時代の変遷と俳人の個人性を無視することと同然である。そのゆえ、時代別 (例えば、初期俳句、元禄俳句、天明俳句など)、流派別 (例えば蕉門俳句) と個人別の翻訳アンソロジーの編集がこれからの課題になっている。さらに、一つの希望がある。翻訳者が一句、一句を古典の芸術作品として、丁寧に扱わなければならないということである。

私が去年編集した蕉門俳句のアンソロジー (Shōmon, Das Tor der Klausur zur

Bananenstaude, Mainz 二〇〇〇)の中には、芭蕉の一番有名な弟子(其角、去来、嵐雪)の代表的な六二句は、見開きの右ページに一句だけずつ置かれている。詳しい解説は向いあう左ページに配置した。なるべく一頁の枠を超えないように努めていたのである。もつと知りたい読者は、巻末の補注を読むことができる。それにより、読者が、先ず句を理解する為の全ての必要なinformationを得てから、句を単独の詩として味わうことができると思うのである。

発表を終えて

長年私は、毎日という毎日来る日も来る日も、日本語のテキストを読んで、日本語で書かれている文学作品を研究する。けれども、その日本語を以って、自分の考えていることを表現するのは、又、別のことである。日本語で講演したことがあったが、あの時はドイツ語の原稿を使って訳したというに過ぎなかった。草案から完全に日本語で書いたものとしては、今度が私にとっては初めての試みである。そして、他国語で原稿を書きながら、講演の内容である「翻訳問題」は、根本的には、文化と文化との伝達問題であることがしみじみと感じられた。

丸1年の日本滞在が実現されて、誠にうれしく思っている。俳句の研究の為に特に貴重な時間なのである。緑に囲まれている日文研で、毎日、自然の移り変わりを五感で体験することができる。

自然だけではなくて、図書館の資料の豊富さにも恵まれている。今書いている蕉門の俳句の翻訳と解釈は、そのおかげでより正確なものになると望んでいる。

ここで、日文研の皆さんに、特に研究協力課と原稿の言いまわしをなだめてくれた光田先生に感謝の意を表わしたい。

よく聞けば
ほととぎすと
声もあり

5月28日

Shigeru May

日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engerbert JORIß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A.トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウイーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Erinst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディア大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗—中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikotaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント(フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ヴィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン=ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳:アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ(ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客 員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考ー『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリーアー (1854～1919) とフリーアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H. W. KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐって—」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑩	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ=デリユーシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性—西欧の俳句についての—一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧②	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」
⑧④	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧⑤	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧⑥	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧⑨	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・日文研 客員助教授) WANG Bao Ping 「明治期に來日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研來訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
⑨④	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリ ード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準 教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレイ仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩4	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
⑩9	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・ 日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪①	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

⑪⑧	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪⑩	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニング コンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪⑨	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン・ノエル・ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noel A. ROBERT 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪⑨	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪④	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8 (2000)	李 応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14 (2000)	アンナ・マリア・トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRÄNHARDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11 (2000)	ペッカ・コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金 貞禮 (韓国・国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑫⑩	12. 6.13 (2000)	ケネス・リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11 (2000)	リュドミラ・ホロドヴィッチ (ブルガリア・ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) Lyudmila HOLODOVICH 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」

⑬②	12. 9.12 (2000)	マーク・メリ (日文研外来研究員) Mark MELI 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10 (2000)	リチャード・ルビンジャー (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Richard RUBINGER 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14 (2000)	辛 容泰 (韓国・東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) SHIN Yong-tae 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12 (2000)	蔡 敦達 (中国・同済大学日本学研究所助教授・日文研客員教授) CAI Dun da 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2000)	バルト・ガーンズ (日文研中核的研究機関研究員) Bart GAENS 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6 (2001)	ポール・グローナー (米国・ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) Paul S. GRONER 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10 (2001)	李 卓 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) LI Zhuo 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」

⑬	13. 5. 8 (2001)	エッケハルト・マイ (ドイツ・フランクフルト大学教授・日文研客員教授) Ekkehard MAY 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12 (2001)	徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) XU Subin 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10 (2001)	ヘンリー・スミス (米国・コロンビア大学教授・日文研外国人研究員) Henry D. SMITH, II 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
142	13. 9.18 (2001)	ジョナサン・オーガスティン (日文研外来研究員) Jonathan M. AUGUSTINE 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2001年10月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

© 2001 国際日本文化研究センター

■ 日時

2001年 5 月 8 日 (火)

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第三回 西洋における俳句の新い聲へ 工部・タム・トルト・ヤ 國譯日本文化研究所